

Gallery PARC
Art Competition 2016
#01

Yukawa Hiroyasu
Nakayasu Keiichi

A survey for the history of fertility, 2016

2016.7.6 wed. – 7.17 sun.

11:00 ~ 19:00 / closed on Mon. / until 20:00 on Fri. / until 18:00 on last day

Gallery PARC
Art Competition 2016
#02

Terawaki Fumi

Letter from amethyst

2016.7.19 tue. – 7.31 sun.

11:00 ~ 19:00 / closed on Mon. / until 20:00 on Fri. / until 18:00 on last day

Gallery PARC
Art Competition 2016
#03

Shima Haruka

MEET / MEAT

2016.8.2 tue. – 8.14 sun.

11:00 ~ 19:00 / closed on Mon. / until 20:00 on Fri. / until 18:00 on last day

Gallery PARC Art Competition 2016

2016年採択プランによる展覧会 *入選者3名(組)による3つの発表を2週ごと、連続開催

2016年7月6日 | 水 — 8月14日 | 日 11:00~19:00

●月曜休廊・金曜日は20:00まで・最終日は18:00まで

実施概要

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、2016年7月6日から8月14日にかけて「Gallery PARC Art Competition 2016」として3つの展覧会を連続開催いたします。本展は様々なクリエイション活動へのサポートの一環として、広く展覧会企画を公募し、審査により採択された3名(組)のプランを実施するコンペティション「Gallery PARC Art Competition 2016」に応募された56のプランから、平田剛志(京都国立近代美術館研究補佐員)、山本麻友美(京都芸術センタープログラムディレクター)の2名の審査員を交えた厳正な審査を経て採択された湯川 洋康・中安 恵一、寺脇 扶美、嶋 春香の3組による展覧会を実施するものです。ギャラリー・パルクではこのコンペティションに2014年から取り組み、本展は昨年に続き3回目の開催となります。

過去募集結果・実施内容

2014年 応募総数44プラン

実施展覧会 「絵画碑 Obelisk picture:薬師川千晴」、「時を泳ぐ人:むらたちひろ」、「A Sense of Mapping -私の世界の測り方-:松本絢子・山城優摩展 (企画)森川穰」

2015年 応募総数34プラン

実施展覧会 「私はここにいて、あなたは何処かにいます。:田中秀介」、「図譜:中尾美園」、「白:明楽和記」

2016年募集結果

応募総数56プラン【個展49プラン:グループ展7プラン:キュレーション展2プラン】

2016年採択プラン

Gallery PARC Art Competition 2016 #01

湯川洋康・中安恵一 Yukawa Hiroyasu・Nakayasu Keiichi

豊饒史のための考察 2016 A survey for the history of fertility,2016

2016.7.6 [水] - 7.17 [日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日のみ18:00まで

Gallery PARC Art Competition 2016 #02

寺脇 扶美 Terawaki Fumi

紫水晶からの手紙 Letter from amethyst

2016.7.19 [火] - 7.31 [日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日のみ18:00まで

Gallery PARC Art Competition 2016 #03

嶋 春香 Shima Haruka

MEET / MEAT MEET / MEAT

2016.8.2 [火] - 8.14 [日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日のみ18:00まで

G a l l e r y P A R C <small>GRAND MARBLE</small>	【お問い合わせ】 Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・パルク] 〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル [グランマーブル] 店舗内2階 【Tel&Fax】075-231-0706 【Mail】info@galleryparc.com 【HP】http://www.galleryparc.com
PressRelease:2016.6.11	

Gallery PARC Art Competition 2016

2016年採択プランによる展覧会 *入選者3名(組)による3つの発表を2週ごと、連続開催

2016年7月6日 | 水 — 8月14日 | 日 11:00~19:00

●月曜休廊・金曜日は20:00まで・最終日は18:00まで

審査員講評(2016年2月末)

■平田剛志(京都国立近代美術館研究補佐員 / 美術批評)

本年の審査も例年通り、審査員個別に提出されたファイル・資料審査を行なった後にギャラリーと審査員2名による討議によって入選プランを決定しました。応募して頂いた方々に心よりお礼申し上げます。

3年目を迎えた今回の公募審査では、応募ファイルのクオリティが着実に上っていることが感じられました。丁寧なヴィジュアル資料だけでなく、テキストの文字数が格段に増え、ステイトメントやコンセプトを通じて展覧会の目的や趣旨を伝えようとする姿勢を強く感じました。しかし、応募プランのテキストを読むにつれ、時代や美術に対して、メランコリック、内省的なプランが多かったようにも思います。また、情報化社会に対する紋切り型の言及が多かったのも特徴でした。いま、展覧会を見ることは、日常においてポジティブな期待、愉悦を喚起させる経験・行為・欲求ではないのでしょうか。

今回選出されたプランは、結果的に具体的なひとつのもの・事象にアプローチをすることで、多角的、重層的なものの見方や多様性を創出、誘発する場を志向するプランでした。また、物質、もののテクスチュアに意識を向けているところも共通しています。タイムラインの情報に惑わされるのではなく、目の前のものの多様性、複雑さを感じ、その背後の歴史性を調べ、想像(創造)することで見えてくる手応えやリアリティこそ、いま、展覧会ができることなのかもしれません。

湯川洋康・中安恵一「豊穰史のための考察 2016」

湯川・中安はこれまで滞在制作・発表場所の「歴史・習俗・習慣」をリサーチし、その土地で収集した素材によって彫刻を制作してきました。その制作は「豊穰史」という大きな枠組みのもと、各地で制作・発表されてきました。本プランではそれらの文脈を取り外して「再配置」する内容であり、「再生産」とも言える試みです。固有の歴史性、地域性から生まれたヴァナキュラーな彫刻が、異なる土地においてどのような関係性を取り結ぶのでしょうか。あるいは、そもそも「彫刻」(芸術?)にとって「関係性」は重要なのでしょうか。それもまた一つの「習慣」として、考察する機会になるかもしれません。

寺脇扶美「紫水晶からの手紙」

なんとなくクリスタルではなく、数ある水晶のなかから「紫水晶」という自身の誕生石を媒介としたことで、展示プランに具体性と現実性がありました。また、日本画の岩絵具(顔料)によって、水晶(鉱物)を描く素材論であり絵画論としても見ることができ、新たな視点を提示しています。展示においては、平面作品と紫水晶にまつわる美学的、文化的な資料展示をどのように展覧会として結晶化させられるか課題でしょうか。「雪は天から送られた手紙である」と書いたのは物理学者の中谷宇吉郎でしたが、紫水晶から送られてくる「手紙」とはどんな内容なのか、待ちたいと思います。

嶋春香「MEET(MEAT)」

「写真を見て描く」絵画は多々ありますが、リアリティの欠如や喪失、表面性をテーマとする絵画が多いなかで、嶋春香のプランは「資料写真」をモチーフに、絵筆の筆致(タッチ)を通じて写真イメージに触れようとする肉感的、身体的な内容でした。それは、絵画における視覚と触覚の関係性を問う試みとして興味深いものですが、躍動的、セクシュアルなタッチ、色彩にも魅了されました。触れられないものに触れようとする、近づこうとすること。「お手を触れないでください」が主流の美術界において、視覚イメージから「欲望」を活性化させようとする嶋の能動的な姿勢に感嘆しました。

■山本麻友美(京都芸術センタープログラム・ディレクター)

自分のことを冷静に分析して言葉にすることは、とても面倒で怖い作業だと思っています。それを繰り返すことで強くなる人もいれば、擦り切れて壊れてしまう人もいます。そんな作業を通して、今回も応募してくれる人がたくさんいたことに感謝します。書類審査を通して、空間やコンセプト、社会との格闘の跡を見つけて、多くの刺激を受けました。また、3年目を迎えたことで、この公募展の意図と応募する人たちの思いが、とてもうまく噛み合い始めていると感じました。それはPARCがアーティストと築いてきた関係性やこれまでの活動の蓄積がもたらしたものだと思います。

全体の印象としては、上辺だけを取り繕った意味をなさないステイトメントではなく、考えて正直に書こうとしてくれた文章が増えたように思いました。考えを深めていくこと、そしてそれを文章にすることは、作品を作るのとはまた別の技術が必要です。あなたのステイトメントは、本当にあなたの作品、あるいはあなたの考えに近いものですか。常にそう思いながら、応募書類とポートフォリオを見ていました。

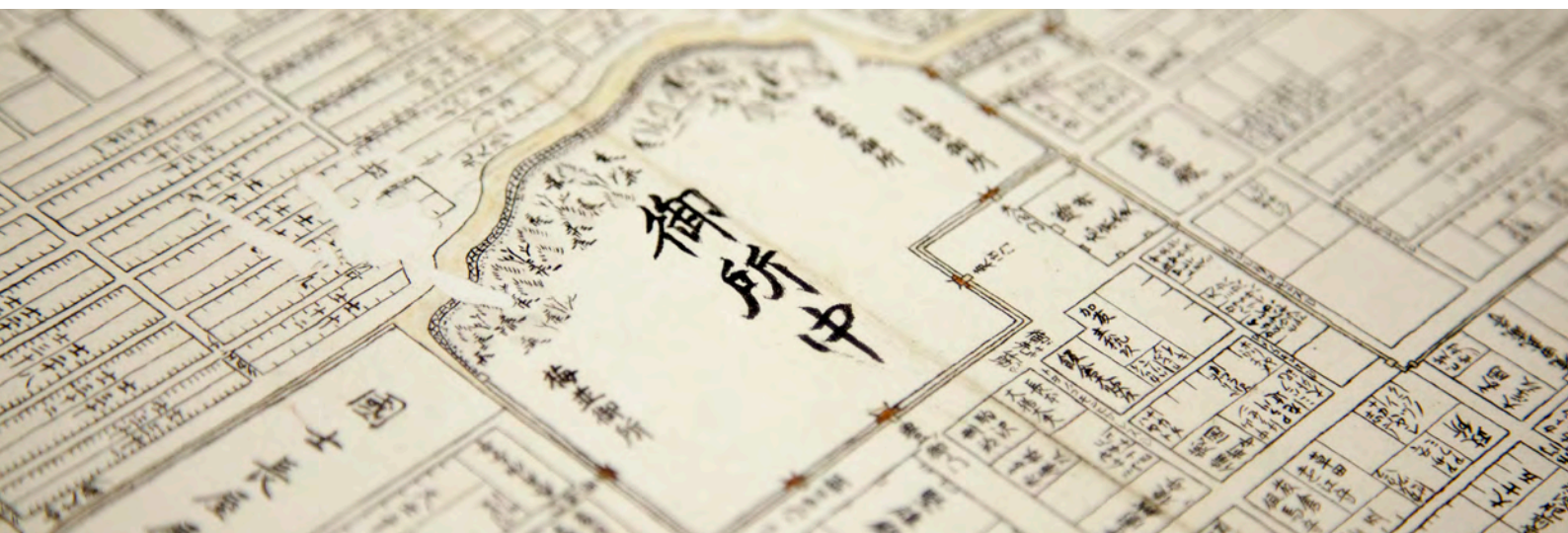
選んだ3つのプランは、展覧会に向けてこれからの成熟や深化が大きく期待されるものです。プランが現実になった時、紙から得た予想を裏切ってくれるのではないかと、そう思っています。

Gallery PARC
Art Competition 2016
#01

湯川洋康・中安恵一 Yukawa Hiroyasu・Nakayasu Keiichi

豊饒史のための考察 2016 A survey for the history of fertility, 2016

2016.7.6 [水] - 7.17 [日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日のみ18:00まで



展覧会について

私たちは「豊饒史」の構築を重要な制作テーマに据えている。それは我々の暮らしにおける「豊かさ」を再構築するための概念である。瞬く間に飽和した物質的な豊かさによって我々の暮らしは大きく変わった。過渡期だと思う。近未来にむけて、物質／精神の均衡についてより意識的になる必要があると思った。

私たちは歴史や習俗、習慣に目を向ける。日々の暮らしでは表立たない地層や歯車や血肉のようなもの。テーマに基づき入念なりサーチを重ねる。関係性を持つ物質を拾い集め、手に取り、組み合わせ、配置し、彫刻を形作る。

さて、近世の国学者・本居宣長は、十代の頃に架空の城主・端原氏を創造しその城下絵図と家系図を記している。私たちは制作活動を始めた当初、それらを見る機会を得た。二つの図は若年期宣長の「支配しうる世界の構築願望の現れ」と一般的に理解されているが、何よりもこの上ない精緻さが圧倒的だった。時間／空間軸の厳密な設定と描写。〈私は如何に存在しているか〉という〈いま・ここ〉の把握を目指す後の仕事へ続くこの精神性。

翻って私たちの表現、テーマや制作過程、そして「豊饒史」を作ろうとする姿勢。それは私たちが宣長の二つの図を眼前にした経験とは切り離せない気がしている。宣長はなぜあんなにも美しく-それは空想的にも、描写としても-描いたのか。この美的平衡をめぐる問いこそが、私たちが考察の名の下に彫刻化を行う動機といえる。

ステートメント

習慣・歴史・習俗をはじめとした過去から現在にわたる人間の営為とその痕跡と向き合い、そのメディアムやコンテクストを通じて多様な関係性を彫刻化する作品を制作する。彫刻化した作品を対象の“平衡”状態と見なし、その“平衡”を空間に配置する。鑑賞者が私たちの示す“平衡”と対峙するプロセスを通して現代社会に介入し、多様な次元を持つ関係性を構築する。

C.V

湯川洋康・中安恵一 Yukawa Hiroyasu・Nakayasu Keiichi

ともに1981年度兵庫生まれ、2012年結成。
大阪を拠点に活動。
2015年第18回岡本太郎現代芸術賞入選。

おもな展示

- 2016「流暢な習慣」(江之子島文化芸術創造センター, 大阪)
- 2015「羽根を休めるハビトゥス」(中之条ビエンナーレ 2015, 群馬)
- 「漂い、刻まれ、漂う偶然」(Galeria大正蔵, 淀江 鳥取 藝住祭)
- 「豊饒史のための考察」(第18回岡本太郎現代芸術賞展, 岡本太郎美術館, 川崎)
- 2014「船は港に寄せられて 港は船に選ばれる 一便りは届く」(Kapo gallery, 金沢)
- 「縣神社美術館プロジェクト」(縣神社/宇治)



《豊饒史のための考察》
2015年
「写真提供:川崎市岡本太郎美術館



個展「流暢な習慣」
2016年, 大阪



ドローイング「理念学」
2013年

Gallery PARC
Art Competition 2016
#02

寺脇 扶美 Terawaki Fumi

紫水晶からの手紙 Letter from amethyst

2016.7.19[火] - 7.31 [日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日のみ18:00まで

《crystal#18》2016 岩絵具、水干絵具、胡粉、麻紙、エンボス加工
《placed a crystal》2015 岩絵具、水干絵具、胡粉、麻紙、エンボス加工 3点組



展覧会について

本展覧会は紫水晶をモチーフに、言葉にならないその声や対話をビジュアルで翻訳する試みです。紫水晶とは水晶の一種で、異方向に光を放つ六角柱状の美しい結晶です。また2月生まれ、私の誕生石でもあります。

私は日常のなかで見つけた美しいものを写生してきました。モチーフを見つめ、向き合う時、彼らは言葉にはならない多くのことを語りかけてくれます。その声を可視化するかのよう絵を描いてきました。写生画は、私とモチーフとの貴重な対話の結果です。しかしそれは、あくまでひとつの視点によるひとつの結果に過ぎません。では、私は何を見ていたのでしょうか。また私の視点からこぼれ落ちたものは何だったのでしょうか。そこに端を発し、見ることを考え、近年は自身の「見出す力」を探求するため、写生画をもとに視点の分解と構築を繰り返す絵画、crystalシリーズを制作しています。

今回の展覧会では、そのような絵画展示を中心に構成し、歴史・神話・化学・精神世界など異なる分野からの紫水晶にまつわる視点も取り入れ、資料なども提示する予定です。様々なパースペクティブから捉えられた紫水晶が同時にそこに存在する。一つの物を見つめることで立ち現れる世界の広がりを見られる機会になればと考えています。

紫水晶の言葉にならない声は、あなたに届くでしょうか。

ステートメント

写生やデッサンをする過程で見ることに関心をもち、人の視点や認識、意味付けについて考察し、主に絵画を描いてきました。

写生というあるがままに生を写し取る行為は、私による視点の固定が必要であると同時に多角的な視点も要求され、また我を捨て素直に受け取る器量も必要です。相反するものも含めた、多数の視点が同時に存在することで成り立つものと言えます。これは私にとって、混沌と美しい世界のありのままを理解し、享受するような行為でもあります。

近年モチーフとして扱っている水晶は六角柱状の結晶で複屈折を生じます。異なるベクトルに放たれた光は美しい反面、その実体を掴みにくくします。岩絵具は光に乱反射し、形態把握を難しくします。また、モチーフの描写で色の明彩度などのバランスが崩れると、それと認識しづらくなります。これらは人の感覚を揺さぶると同時に、新たな発見を誘発します。その認識(実体)と認識の揺らぎを、画面に混在させたいと考えています。

そのために、水晶の写生画をもとにエンボス加工と日本画技法を用い、幾つもの工程を経ながら制作しています。工程ごとに分解と構築を繰り返すことで、私自身の「見出す力」を探求し、新しい視点や新鮮な出会いを獲得しようとする試みです。

物事を分節し、意味を見出し構築・享受する。それをまた分節して構築・享受する。止まることのない個人のその行為にこそ、先入観や既存概念に捉われずに新しいステージへ進んでいく力が潜んでいるのかもしれませんが。作品はそのひとつの結晶であり、より良い世界への私の希望が込められたものでもあるのです。

C.V

寺脇扶美 Fumi Terawaki

1980年愛知県生まれ
2007年金沢美術工芸大学大学院 美術工芸研究科絵画専攻日本画コース 修了

おもな個展(抜粋)

2015 寺脇扶美個展, Gallery TEN, 石川
2013 come and go, gallery near, 京都
2003 ゆう, 犬山アートドラッグ・センター, 愛知

近年のおもなグループ展(抜粋)

2015 ころを打つDM, +1art, 大阪
-- きょうとカレント展(京都市美術館別館2階)
-- 漂流飛翔(白白庵, 東京)
-- ZONE#1 (Gallery TEN, 石川)
2014 TAKE OUT ART! - アートをお持ち帰りの小作品展 - (gallery near, 京都)
2013 日韓現代アート交流展 (HEIS GALLERY, 福岡)
-- KYOTO STUDIO (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)
2012 あいちの現代美術2 GALLERY GOHON 活動紹介(アトラボあいち, 愛知)
2011 complerelation vol.4-カオスモスのさかなもぐら-(渋川市美術館市民ギャラリー, 群馬)

おもな受賞

2016 BIWAKO大賞展, 入選
-- 第2回「藝文京展2016」, 入選
2014 第2回小泉淳作記念鎌倉芸術祭日本画公募展, 入選
2005 臥龍桜日本画大賞展, 入選



《紫水晶からの手紙》(部分)

2015

Gallery PARC
Art Competition 2016
#03

嶋 春香 Shima Haruka

MEET / MEAT MEET / MEAT

2016.8.2 [火] - 8.14 [日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで / 最終日のみ18:00まで



心的な変化や身体性があまり感じられず、どこか物足りなく思うときがある。それは描いているのに物質感を持たない、デジタル上のイメージ特有の希薄さなのかもしれない。デジタル上の重さの単位(何キロバイトなど)は存在し、データの重さは数値で理解することができるが、結局はそれ自体も目には見えない重さだ。

確かに存在しているはずだが、どこかはぐらかされる特異性。私にとって写真や画像の中からすくい上げられるイメージとは、見る人の視触覚を刺激するにも関わらず、肉体を持たない幽霊のような存在なのである。

C.V

嶋 春香 SHIMA Haruka

1989年北海道生まれ

2012年京都造形芸術大学 美術工芸学科 洋画コース 卒業

2014年京都市立芸術大学大学院 美術研究科修士課程 絵画専攻 油画 修了

おもな展覧(抜粋)

- 2015 93.未来の途中の先を夢見る。/ 93. Dream Ahead of "on the way to the future" (ARTZONE/京都)
 - 京都銀行美術研究支援制度 15周年記念展覧会"京銀コレクションの15年" (京都銀行金融大学校 桂川キャンパス/京都)
 - Studio Exhivisit 2015 12スタジオと12の展覧会 "punto open studio" (共同スタジオpunto/京都)
 - 個展「Half-length」(京都市芸術廉価中心・Artothèque Gallery/京都)
 - Sign of Happiness (Antenna Media/京都)
 - これからの、未来の途中—美術・工芸・デザインの鋭い11人展 (京都工芸繊維大学 美術工芸資料館)
- 2014 KUAD graduates under 30 selected (ギャラリー・オープン/京都)
 - アートアワードトーキョー丸の内 2014 (行幸地下ギャラリー/東京)
 - 京都市立芸術大学作品展 (京都市立芸術大学 アトリエ棟4F)
 - 作品中!2014 (galerie16/京都)
- 2013 AUTUMN HURRICANE (京都市立芸術大学 小ギャラリー・大ギャラリー)
 - 個展「Portrait」(京都市立芸術大学 小ギャラリー)
- 2012 RADICAL SHOW 2012 (渋谷ヒカリエ8/ 東京)
 - PHANTASMA -ファンタズマ (Antenna Media/京都)
 - アートピーポー・マッピング (ギャラリー@KCUA/京都)
- 2011 Hers' 2011 (同時代ギャラリー/京都)
 - 浮き出る、残像、見られて、とりもつ (京都造形芸術大学 gallery B37/京都)
- 2010 DELETE (ギャラリーstarkart/スイス)
- 2009 TenTen09 京都造形芸術大学・瓜生山祭学生展示企画 (同大学/京都)
- 2008 月イチ展#2~#5 (全4回) (gallery casa de sola 他/京都)

受賞歴

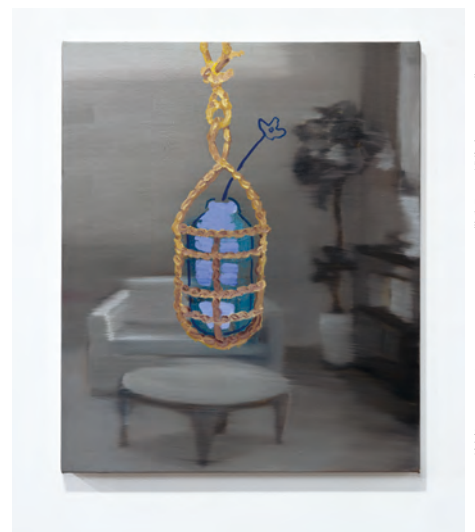
- 2014 京都市立芸術大学作品展 大学院市長賞
- 2013 京都銀行美術支援制度 2013年度購入作品選抜
- 2012 京都造形芸術大学 卒業制作展 学科賞

コレクション

- 2014 京都市立芸術大学
- 2013 京都銀行



《Touch #觸逸の民藝1》 2015 カンヴァスに油彩



《Touch #図版22紙袋》 2015 カンヴァスに油彩



《Touch #gold yellow "hip" (R)》 2015 発泡スチロール・石膏粘土・ニス・アクリル布

展覧会について

「形態は機能に従う」と建築家ルイス・サリバンの有名な言葉があるように、形態は常にその外形に、それに先立つ機能を有している。しかし、果たして世界はそれに当てはまるものばかりなのであろうか。私は実生活の知恵で、本来の機能とは別の使い方、たとえば脚立を机の天板に支える脚代わりに使用したり、ナイロンたわしをセーターの毛玉とり代わりに使用するなど、本来の用途以外に代用することがある。

それが意味するところは、物に唯一絶対の意味は存在せず、私と世界の間で成立する「形態」を巡った思考の表れとも言えないだろうか。

私はこれまで、自作の中で筆致 ("Touch" = さわる、触れる、手触り、関わりを持つ) への関心をもってきた。それはカンヴァスと絵筆との関係性の事だけではなく、実際には触れることのできない写真などの「イメージ」に「肉付け」しようとする身体的行為の表れだ。自身の感覚を通してイメージを解釈すること・イメージの定着 方法について一貫して探ってきたが、それらの考えの根幹には「写真の何を見ているのか」という疑問が前提にある。

本展では、イメージから受ける「印象」について考察した作品を並べ、その疑問にまた一歩近づきたい。

ステートメント

時々デジタル上で絵を描くことがあるが、実際に紙とペンでドローイングしたときのような